



## 小さい頃見ていた父の背中。 藤布への思い継ぐ。



遊絲舎・藤織り職人

小石原 充保 さん (41歳・網野町)

**皆**さんは藤布をご存じですか。藤布とは、藤のツルからとれる繊維をつなぎあわせて糸にし、織り機にかけたものです。私は28歳の時から家業に従事し、藤布を使った帯などの制作、販売に携わっています。

高校卒業後、専門学校に進学した私は20歳の時に、大学に編入したいと考えました。学費などさらに親に負担をかけることになるため相談したところ、父が「大学に行つて、いろんな経験をして来い」と言ってくれました。幼少の頃から機場に立つ両親の背中をずっと見てきたので、何となく、ゆくゆくは実家に帰るんだろうなと思っていました。父の言葉を聞いたとき、将来は家業を継ぎ、恩返しをしようと思いました。

藤布の制作は、まず野山に入つて藤のツルを採取することから始まり、10ほどの工程があります。中でも繊維から不純物を取り除く灰汁炊きは、約4時間を要するなど手間がかかります。昔ながらの木灰を使った製法にこだわっています。

現在は、全国を飛び回り、主に百貨店の展示会で帯を販売。長いときは3カ月ほど京丹後を離れることになりませんが、直接お客様の反応が聞ける貴重な機会になっています。また、知り合った方が京丹後に来てくれることもあるため、積極的に丹後の豊かな

な自然や食をPRしています。

父と一緒に働いていると、要協することなく良いものを追求する姿勢、考え方に感服させられます。今は助けてもらつてばかりですが、そうした部分を見習いながら、お客様に喜んでもらえる製品を作り続けたい、そして、古くから伝わる藤布を次代に残していきたいと思つています。

### 縄文時代から伝わる「藤布」

「藤布」は、縄文時代から人々の命を守る衣装として愛されてきました。江戸時代中頃には、木綿の普及に伴い衰退していき、昭和に入る頃には、日本から消滅したものと考えられていましたが、昭和37年の民俗資料調査により宮津市の世屋で織られていることが発見され、「丹後の藤織り」として京都府登録無形民俗文化財に指定されているほか、「丹後藤布」として京都府の伝統工芸品にも指定されています。